＜別紙１＞

第三者評価結果報告書

①第三者評価機関名

公益社団法人神奈川県介護福祉士会

②施設・事業所情報

名称：有馬川はなみずき保育園		種別：保育所	
代表者氏名：原田　真弓		定員（利用人数）：	６０名
所在地：〒216-0002　川崎市宮前区東有馬５－２３－４３			
TEL：０４４－８７０－３４３４		ホームページ： http://www.fujimiplaza.com/hanamizuki	
【施設・事業所の概要】			
開設年月日：２０１３年４月１日			
経営法人・設置主体（法人名等）：社会福祉法人子の神福祉会			
職員数	常勤職員：　１２名	非常勤職員	１０名
専門職員	保育士　１９名		
	看護師　１名		
施設・設備の概要	保育室６		

③理念・基本方針

＜保育理念＞
１．保護者と協力しながら、子ども一人ひとりの主体性を大切にしていく
２．地域の人々との交流を図り、子育て支援を通じて、福祉の役割を担う
＜保育方針＞
１．個性を受けとめ、安心して過ごせる保育環境を整備する
２．地域の人々と関わる中で、集団行動のマナーを培う
３．一人ひとりの保護者の思いを受けとめ、支援する
４．発達に応じた活動が出来るよう環境を整える
５．大人や子どもとの関わりの中で信頼関係をつくる
６．人の話を聞いたり、自分の思いを伝える中で、考える力を育てる
＜保育目標＞
１．心身ともに健康な子
２．人を思いやる子
３．感性豊かな子

④施設・事業所の特徴的な取組

○子どもたちの主体性を尊重した保育に取り組み、保育士は目標を立てて、環境整備を行っている。子どもたちが興味を持った遊びを選ぶことができるよう、コーナー遊びやスペースなどの環境を整えている。子どもたちはコーナーに行き、今日は何をして遊ぶかを決め、おままごとやレゴブロック、車遊びなどの好きな遊びを行っている。時には、おままごとで遊んでいる子どものところに、車を持った子どもが行き、車を使って食べ物を運んだりして、遊びが発展することがある。外遊びでは、タイヤを引っ張る子どもや、タイヤを重ねて秘密基地にする子どもなど、さまざまである。
○食育に力を入れている。１１月は鍋パーティを企画したり、秋のサンマの時期に

は、５歳児は生のサンマを触り、焼いてもらい、栄養士が作成したフェルトのサンマの見本を使い、食べ方を教えてもらっている。子どもたちは上手に箸を使い、身を外し骨を取り出して、きれいに食べている。こどもたちは自分の食べる量を口頭で伝え、残食がないようにしている。また、季節ごと二十四節気の話を分かりやすく説明してもらっている。郷土料理も、どこの地域の料理か説明して提供している。

⑤第三者評価の受審状況

評価実施期間	２０２５年6月４日（契約日）　～ ２０２６年2月１２日（評価結果確定日）
受審回数（前回の受審時期）	2回目（２０２０年度）

⑥総評

◇事業所の特色や努力、工夫していること、事業所が課題と考えていること等

○有馬川はなみずき保育園は、定員６０名の保育園で、１階に０～２歳の乳児クラス、２階に３～５歳の幼児クラスの保育室がある。どのクラスも１０人前後の人数で、アットホームな雰囲気の中、職員が子どもたち全員を把握して、一人ひとりの個性と主体性を大切にした保育を実践している。

○園内の設備や遊具、寝具などは、消毒や清掃を心がけ、安全で安心できる環境を整えている。また、保育室の中に、ごろんと横になることができるスペースや、ゆっくり絵本を読むスペースなどを作っている。保育士手作りの衝立を活用し、こどもたちが心地よく遊んで過ごせる場所を作っている。天井や壁には子どもたちの作品を飾っている。

○子どもたちは、一人ひとり発達状況や家庭環境が異なるため、子どもの気持ちに寄り添い、状態に応じた保育を行っている。外国籍の子どもがいて、家庭では両親が母国語で話すため、園でしか日本語を話す機会がない。絵カードを作り、保育士はカードも使って「手を洗おうね」「靴を履くね」など、伝えている。乳児クラスも、言葉かけと絵カードを使用することで理解が深まり、言葉がゆっくりな子どもも言葉が出たりと、効果が現れている。

○０歳児は、ミルクや離乳食など、発達に応じた保育を行っている。ミルクは抱っこして、落ち着いた雰囲気で、愛着関係を作りながら行っている。幼児クラスでは、自分が食べられる量を考えられるようにしている。テーブル拭きや片付けなど、当番をやりたい子どもには、できることをやってもらっている。園内にはお散歩マップがあり、明日はどこの公園に行くか話し合い、自然と親しんだり、交通ルールを学んでいる。

○０歳児の保育では、離乳食も後期や完了期に入り、安全や安定に配慮して提供している。子どもたちとはスキンシップを多く取りながら、愛着関係を築いている。外遊びでは、歩ける子どももハイハイをする子どもも一緒に園庭で遊んでいる。こどもが２段の跳び箱に乗ることができた時には、保育士は「できたね」「じょうずだったね」と一緒に拍手をして喜ぶようにしている。

○１、２歳児は、いやいや期に入り、保育士は「そうだね、いやなのね」「じゃどうしようか」と声かけをしながら、今何がやりたいのかを探っている。子どもがうまくできないことでも、やりたい気持ちがあれば尊重して見守っている。また、子どもが困っている時は、「こうしたらできるよ」とさりげなく手伝うようにしている。

○３歳児の保育では、集団での行動が多くなり、ロッカーも自分用のものがある。自分のことは自分で行うことが多くなるため、保育士はゆっくりと話しかけ、子どもたちが落ち着いて自分のことができるよう働きかけている。４歳になると自分はこ

うしたいという気持ちが強くなり、子ども同士でトラブルになることもある。保育士は、相手の気持ちを考えることができるように関わっている。また遊び方も活発になってくるので、危険を自分で考えられるようにしている。５歳児は話し合いを行い、皆で考えて解決していくことができるよう支援している。子どもたちは、相手の気持ちを考えられるようになっている。

○行事のお知らせなどは、園だよりに掲載する他、コドモン（保育向けICTシステム）を使用して保護者に配信し、いつでも内容を確認できるようにしている。また、コドモンで配信したものは、玄関にも掲示している。幼児クラスは毎日、写真を使って活動の記録を配信している。活動の写真配信は、あくまでも自分のクラスだけなので、園内にもドキュメンテーションとして掲示している。乳児クラスはコドモンで、日々のやり取りを行っているが、週１回は活動の写真を付けることにしている。今秋より環境を整え、SNSで子どもたちの活動の様子を見ることができるようにしている。

⑦第三者評価結果に対する施設・事業所のコメント

評価結果につきましては、日々の保育実践や運営について、客観的に振り返る大変貴重な機会となりました。
利用者アンケートでは、保護者の皆さまが本音で意見を伝えられる場となり、本園の強みや改善点がより明確になったと受け止めております。
改善を求められた点につきましては真摯に受け止め、職員一体となり改善に向けた取り組みを継続するとともに、今回の評価結果を今後の保育・運営に活かし、保育の質の向上に努め、一過性のものとせず、職員間で共有しながら、日々の保育を見直す機会として活かしてまいります。

⑧第三者評価結果

別紙２のとおり